

社会にインパクトある研究

## E. しなやかで心豊かな未来創造



E1 心の豊かさ



# 心に豊かさを灯す 社会の創造

~科学・技術を適切に組み入れて~

# プロジェクト理念



科学・技術が進展する現代にあって、本当の心の豊かさとは何かが問われている。この新たな問題に対処し、**いかにして科学・技術を社会に適切に組み入れ、精神的豊かさ**に繋げるかが人文社会科学にとっても喫緊の課題となっている。

その解決のために、「福祉」、「善い暮らし」、「幸福」という意味をも包括する**Well-being**の概念の本質を明らかにし、その作業を軸にしてこの概念を社会へと実装可能にする提言を行う。

すなわち、この概念を多角的・総合的に解明し、東北地方の災害体験および地域の価値観とも関連づけることを通じて、**「良く生きること」の内実を根本的に吟味し、同時に、社会生活や医療、環境、工学などの現場でその有効性を具体的に検証し、さらには翻って、それらの成果をどのように「良く生きること」の具現化に適切に組み込みうるかを**探究して、心に豊かさを灯す社会の実現に貢献する。

※ well-being: 社会のあり方や人の生き方の「良さ」や「善さ」を指す。広くは日本語の「よさ」（よい）に相応する概念だが、幸福（「良さ」）と道徳性（「善さ」）が結びつけられることも多い。

# プロジェクト概要



## 1 社会的課題

生命倫理や環境倫理、工学倫理などの議論を通じ、**科学・技術が社会に及ぼす影響**が自覚されるようになった。こうしたなかで、人間や社会を中心に据える見方が強調されるようになり、**科学・技術の意思決定に様々な利害関係者が参加**することが求められている。また、東日本大震災を経て地域に根付く知や規範が見直されており、そのような**ローカルな知を科学・技術の意思決定に組み込んでいく**必要性が生じている。

## 2 解決の方法

本プロジェクトでは、福祉や善い暮らし、幸福という意味をもつ **Well-being** という概念に注目する。**地域・社会に根ざした Well-being を確立し、それを具体化する科学・技術の意思決定方式を実現**することで、心豊かな社会の構築に貢献することを目指す。具体的には Well-being とは何かを思想史・社会科学・地域研究・科学・技術の観点から探求し、Well-being を実現するようローカルな知を反映した科学・技術の意思決定の方法論を開発する。その方法論を実際の研究に対して適応・評価し、普及・人材育成につなげる。

## 3 東北大学の強み

東北大学文学部・文学研究科では、**2003年度より Well-being とは何かについて研究**を行ってきた。**理系研究科などとの連携実績**や、**60年以上にわたる東北文化の研究**がある。また、理系研究科などに文理融合領域の研究をしている研究者がおり、地域と密着した災害研究も行われており、**分野・部局を超え、地域に根ざした研究・活動を行う**ことができる。

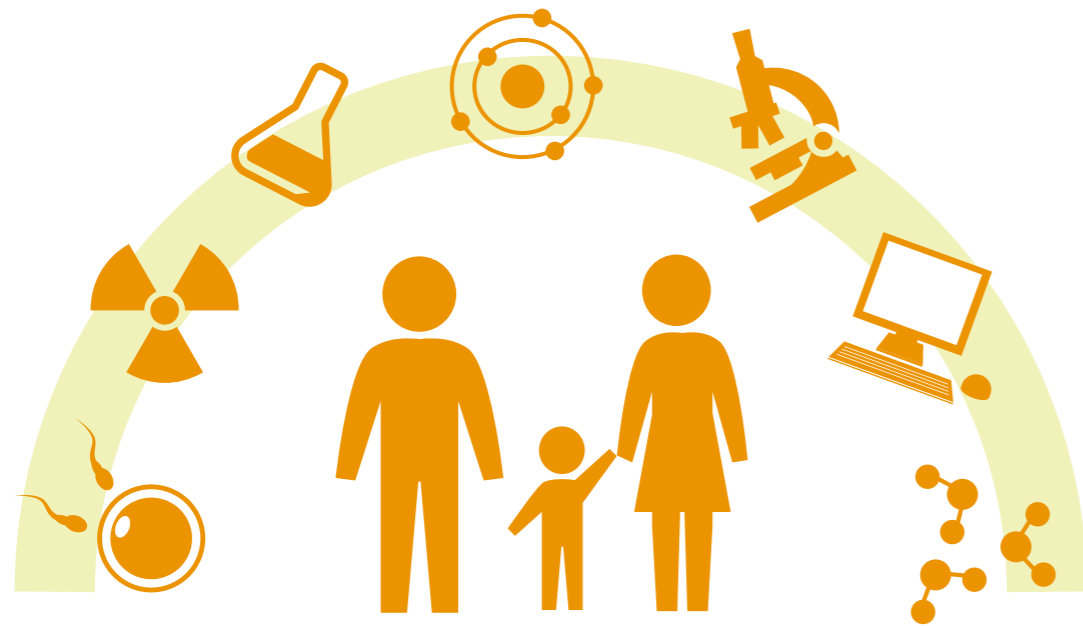
## 4 プロジェクトの効果

本プロジェクトを通じて**見過ごされてきた東北地方の価値を再評価**すると同時に、様々な人々が参加し、その**多様な知や期待、懸念を組み込んだ科学・技術と社会を構築**する。また、**社会と科学を調和的に考え、行動／研究する人材を育成**する。

## 5 組織体制

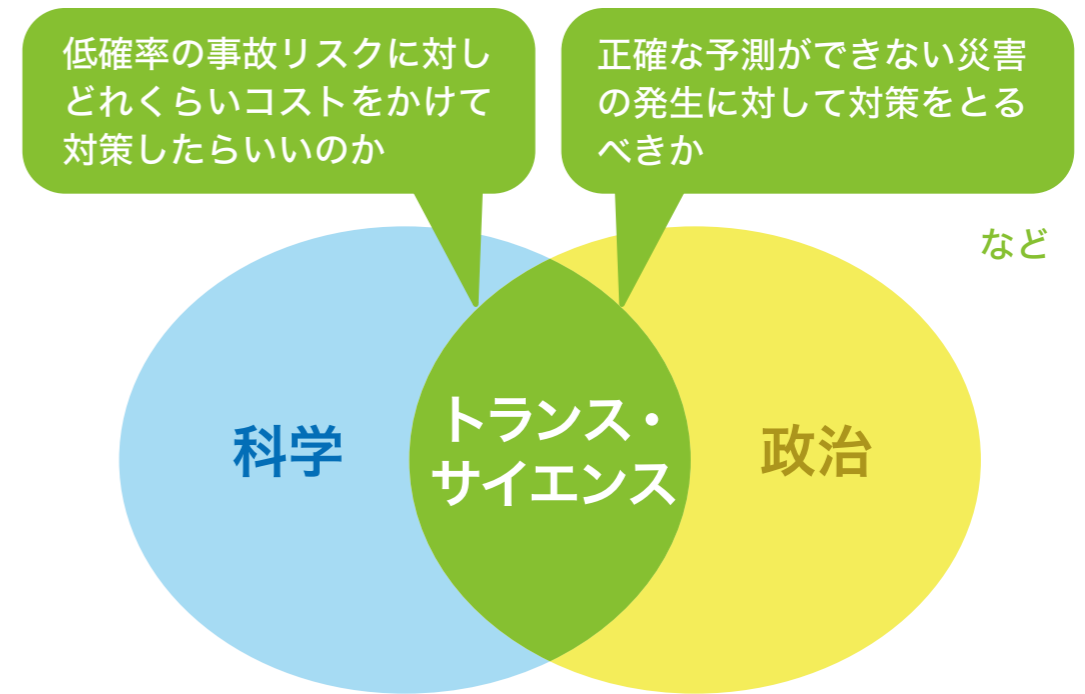
本プロジェクトでは、**東北大学文学研究科**が中心となって Well-being を探求する。また、様々な部局に所属する研究者が集まった**科学・技術と心豊かな社会研究センター**が、Well-being 研究の成果を踏まえて科学・技術の合意形成の方法論を確立し、実装に向けたシンクタンク機能を果たし、さらには人材育成の場となる。

# 科学・技術と現代社会



## 社会と深く関わる現代の科学・技術

生命倫理、環境倫理、工学倫理や、原子力発電に関わる問題など、科学・技術が人間の倫理や社会に及ぼす影響が自覚されるようになった

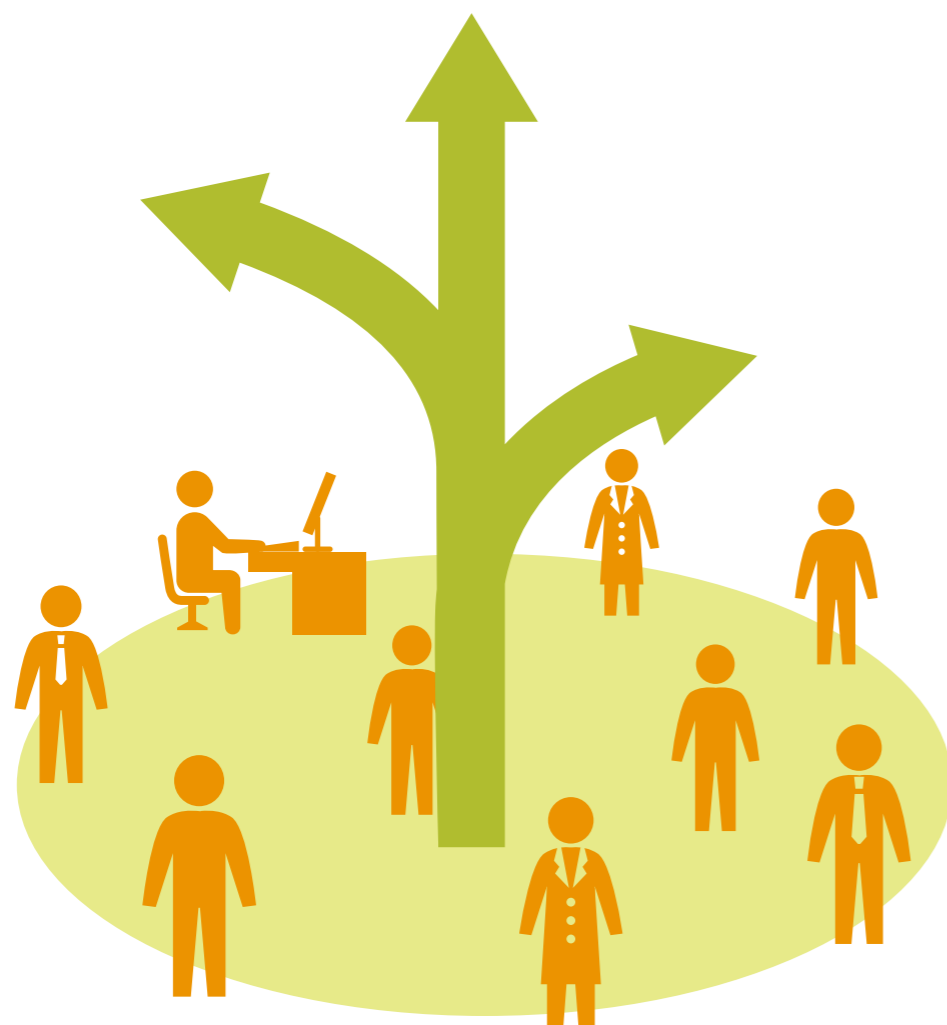


## トランス・サイエンスの問題

科学・技術のもたらす問題には、不確実さを含むなどの理由により、どのような対応をしていくかを科学だけでは意思決定できないもの（トランス・サイエンス）がある

科学・技術だけでは解決できない社会的問題がある

# 開かれた意思決定の必要性



- 科学・技術に関わる社会的問題を解決するには、人々がどのような社会を望むのかを考えていく必要がある
- このような問題に対しては、科学者・技術者に加えて様々な利害関係者が意思決定に参加する必要がある
- 技術の実用化段階のみならず、上流の研究開発段階から研究者・利害関係者が対話し、望むべき社会像を共有し、ニーズや懸念を研究に反映していくことが求められている

研究の上流段階から社会の声を取り入れる必要性

# ローカルな知と意思決定



## ローカルな知を意思決定の中へ

人が生きる場の形成には地域や集団に固有な知や規範（ローカルな知）が大きな役割を果たす

人々を豊かにする科学・技術を実現するには、ローカルな知を科学・技術の意思決定に組み込む必要がある

## 東北地域の価値と科学・技術

東日本大震災の経験から地域に根付く価値観や、人々の公助、自助のあり方が明らかになった

災害復興研究等の東北地域に関わる様々な科学・技術には、地域に根ざした知や誇りを反映することが望ましい

地域・社会に根ざした知や豊かさを科学・技術へ

# キー概念としての Well-being



- Well-being は、「福祉」「善い暮らし」「幸福」という意味を包括する概念
- 人々の豊かさを理解するのに有用
- 全学問領域の普遍的基盤
- 普遍性とローカル性両方を包含する
- Well-being をいかに実現するかには多角的なアプローチが必要

Well-being を軸に心豊かな社会を探求

# プロジェクトの目標

## 地域・社会に根ざした Well-beingの確立

「よく生きる」とは何かを吟味する

Well-beingを災害体験や地域の価値観など、**地域・社会**と関連付ける

現在実際にある**社会課題**に**どう関わるのか**を示す

## Well-beingを実現する 科学・技術の合意形成の確立

**Well-being**をもたらすような**科学・技術の進め方**を見出す合意形成の方法論を構築する

開発した**方法論の実装・評価・普及**を通じて心豊かな社会を構築する

科学・技術を適切に組み入れた心豊かな社会を形成



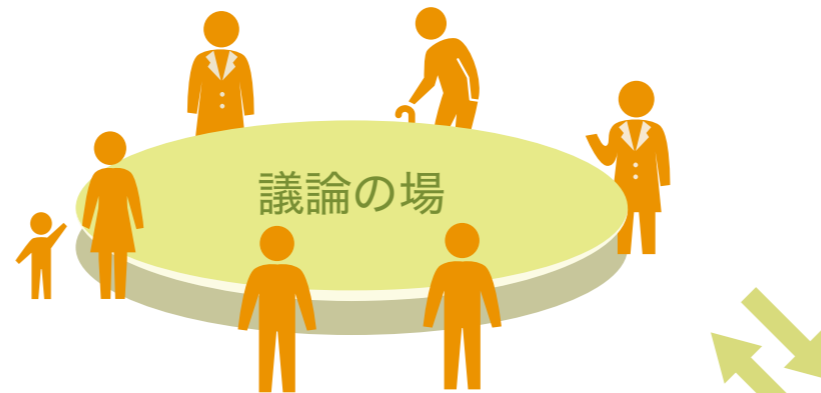
# 解決のシナリオ

## ② 方法論の確立

### ① 概念の創出



Well-being と科学・技術について、  
思想史、社会科学、地域研究のアプ  
ローチで解明



社会に豊かさをもたらすにはどう科  
学・技術を進めたら良いのかについ  
て、合意を形成する方法論を構築

### ③ 実装と評価



科学・技術の研究・実践に対してシ  
ンクタンク機能を発揮し、合意形成  
の方法論を実装・評価

3つのアプローチで Well-being の実現につなげる

# ① 概念の創出

## Well-being そのものを探求

- 思想史では Well-being の成立基盤と展開を研究
- 社会科学では人々の幸福感や満足感を研究
- 地域研究では東北の災害体験、地域の価値観を研究
- Well-being と科学・技術では、人々が科学・技術に何を期待し、懸念しているかという観点から ELSI (科学・技術の倫理的・法的・社会的課題: Ethical, Legal and Social Issues) を研究



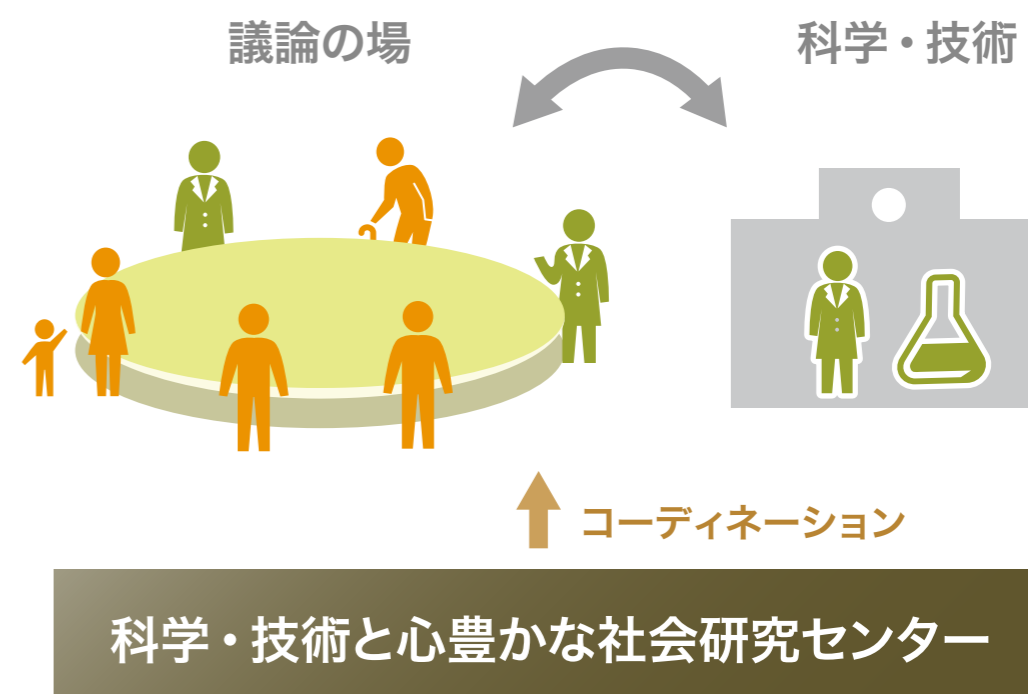
地域・社会に根ざした Well-being を探求

## ② 方法論の確立

科学・技術の合意形成のなかに  
Well-beingを適応する方法論を構築

- 地域の対話型イベント（東北カフェなど）等から東北地方の価値やローカルな知、ニーズ等を特定
- 科学・技術の課題に応じて理学・工学などの研究者と協働し、研究者同士・地域の人々などの多様な人々が議論する場をコーディネート
- 合意形成を通じてローカルな知やニーズ、要求を科学・技術の研究にフィードバックする方法論を考案

多様な人々による  
科学・技術の参加型アセスメント  
対話・熟議・合意形成などの方法論の構築

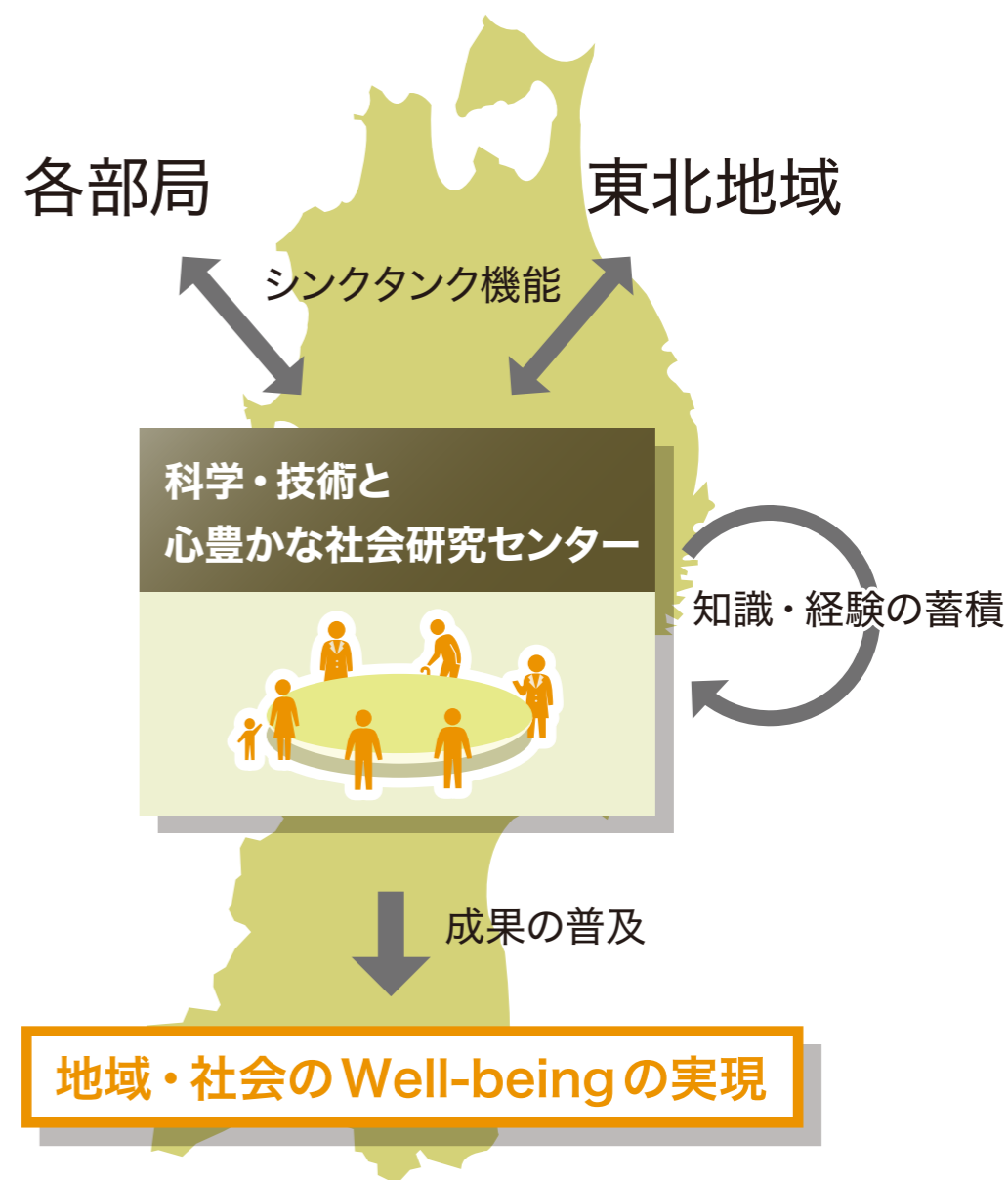


Well-beingを科学・技術に組み込む方法の開発

### ③ 実装と評価

**シンクタンク機能**を通じて  
科学・技術の合意形成の方法論を実装・評価

- ②で構築した方法論を災害研究等の研究に実装していき、社会を心豊かにする研究の進め方を提言
- 実装の結果を評価し、知識・経験を蓄積
- 実装を行うなかで、大学や企業・自治体の人材を育成し、方法論の普及と発展につなげる
- 東北のものづくり・まちづくりにつなげていく



地域・社会の Well-being を実現する

# 東北大学の強み



## 文学部・文学研究科の研究蓄積

### 人間の21世紀的Well-being研究プロジェクト

2003年度より「Well-beingとは何か」を研究してきた

### 理系研究科との連携

21世紀COEやGCOE、リーディング大学院プログラムなど理系研究科との連携実績がある

### 「社会階層と不平等教育研究拠点」との連携

格差問題を扱う研究プログラム（21世紀COE、GCOE）の実績があり、成果をプロジェクトに組み込むことができる

### 東北文化についての研究

60年にわたる東北地方の地域文化の研究蓄積がある

## 境界領域の研究の蓄積

### 文理融合の研究者と異分野共同

理学研究科や医学系研究科、環境科学研究科、工学研究科、高度教養教育・学生支援機構などに文理融合型研究者が存在し、部局を超えた協働ができる環境にある

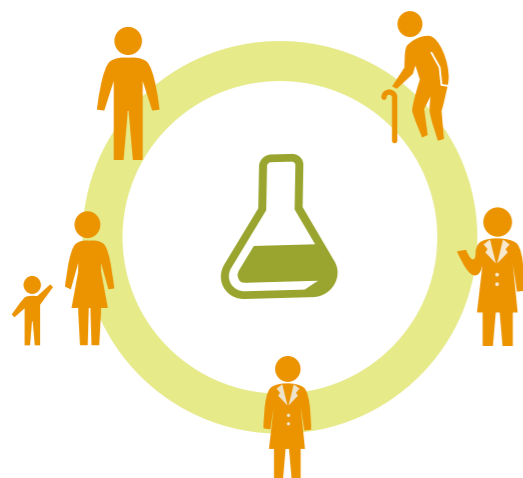
### 地域と密着した研究の蓄積

災害研究を通じ、地域の課題と密着した人文社会学研究・科学・技術研究が蓄積している。

分野・部局を超え、地域に根ざした研究・活動が可能

# プロジェクトの効果

## 人々が自ら参加する 科学・技術と社会の創出



多様な主体による熟議を通じ、科学・技術に様々な知や期待、懸念を組み込む  
多様な知を生かして地域と科学・技術がともに発展する社会へ

## 東北地方の価値の 再評価



見過ごされてきた知や地域文化を再評価し、生活の中に意義づける  
地域を愛し、地域創生のアイデアを生み出す人々を育成する

## 社会・科学をつなぐ 人間の形成



地域・社会と科学・技術の現場を俯瞰してその関係を調和的に考え、問題解決のために行動／研究する人材を育成

地域と科学・技術が調和した、誇りある東北の創出

# 組織体制 (暫定版)

## 科学・技術と心豊かな社会研究センター (仮)

Well-being を科学・技術に組み込む方法を探求、実装

文学研究科を中心部局とし、東北アジア研究センター、災害科学国際研究所、医学系研究科、理学研究科など学内の様々な文科系・理科系部局の研究者から構成される

プロジェクト運営委員会

Well-being 基礎研究部門

Well-being に関する思想史、社会科学、地域研究

協働・連携

科学・技術の合意形成研究部門

合意形成の方法論確立, シンクタンク, 人材育成

事例ごとにプロジェクトチームを構築

プロジェクトチームA

プロジェクトチームB

プロジェクトチームC

...

地域・社会

学内部局

# 今後のマイルストーン

	2年後	5年後	10年後	30年後
<p>人々が自ら参加する <b>科学・技術と 社会の創出</b></p>	<p>Well-being を基盤 とした科学・技術と社 会に関わる枠組み形成  理学・工学等との協働 プロジェクト開始</p>	<p>協働プロジェクトの 成果を踏まえた合意 形成の方法論構築と 社会実験の実施</p>	<p>合意形成のモデルケー スの提示  東北地域への方法論の 部分的実装</p>	<p>地域と科学・技術が調和した <b>心豊かな社会</b> の構築</p>
<p><b>東北地方の 価値の再評価</b></p>	<p>東北地方のローカル な知の再発見  東北カフェ等の 対話イベントによる 双方向的な知の形成</p>	<p>まちづくり・ものづくり とローカルな知の 関わりの明示  東北カフェの普及</p>	<p>地域とタイアップした まちづくりのプロジェ クトの立ち上げ  地域と対話する 人文社会科学の提示</p>	<p><b>社会と科学・技術</b>とが 調和した<b>東北地方</b>の実現  <b>高い誇り</b>の持てる 地域社会と文化の創生  科学・技術の分野と分野、科学 ・技術と社会をつなぐ一貫した <b>教育システム</b>の実現  大学と企業、技術士、自治体 等が連携した<b>現場教育</b> の定着</p>
<p><b>社会・科学を つなぐ人間の 形成</b></p>	<p>科学・技術の分野と分野、 自らの専門分野と社会を つなぐ思考をもった大学 院生の育成  技術士などと連携した 現場教育の試行</p>	<p>科学・技術の分野と分野、 社会・技術と社会をつなぐ 教育・人材育成制度の開始 (副専攻など)  現場教育の普及</p>	<p>科学・技術の分野と分野、 科学・技術と社会をつなぐ 全学での教育・人材育成 システムの開始  現場教育の体系化</p>	